

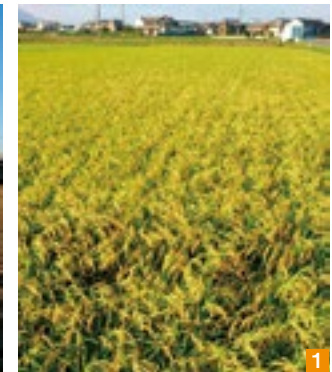
農業女子プロジェクト「チームはぐくみ」パートナー校・東京農業大学

農業×女子＝無限大！ 未来の農業女子を目指す

職業として農業を選択する、未来の農業女子育成に取り組む「チームはぐくみ」。
パートナー校・東京農業大学では積極的に活動を行い、着実に若い芽が育っています。
取材・文／岸田直子 撮影／泉山美代子



農業女子のインターンシップに参加した越地さん。1 マルイシファーム（神奈川県三浦市）を見学。2 蕎麦播種機についての説明を受ける。3 トラクターの運転を体験。4 新規就農者の畑でブロッコリーの定植を体験（2～4はいずれも茨城県阿見町）。5 株式会社mosir（モシリ／北海道別海町）の牛舎を見学。



カントリーファームで農家実習をした高原さん。
1 土寄せ機の扱いの難しさを実感。2 ブロッコリーの苗に水やり。



今春、卒業後に実家で就農する萩さん。
1 約30haの水田を兄と2人で管理していく。
2 大型農機も使いこなせるように、実家での実習で経験を積んだ。



**女性の感性を受け入れる
農業の懐の広さに気づく**

3年生の越地彩海さんは、合計9日間のすべてのインターンシップに参加しました。

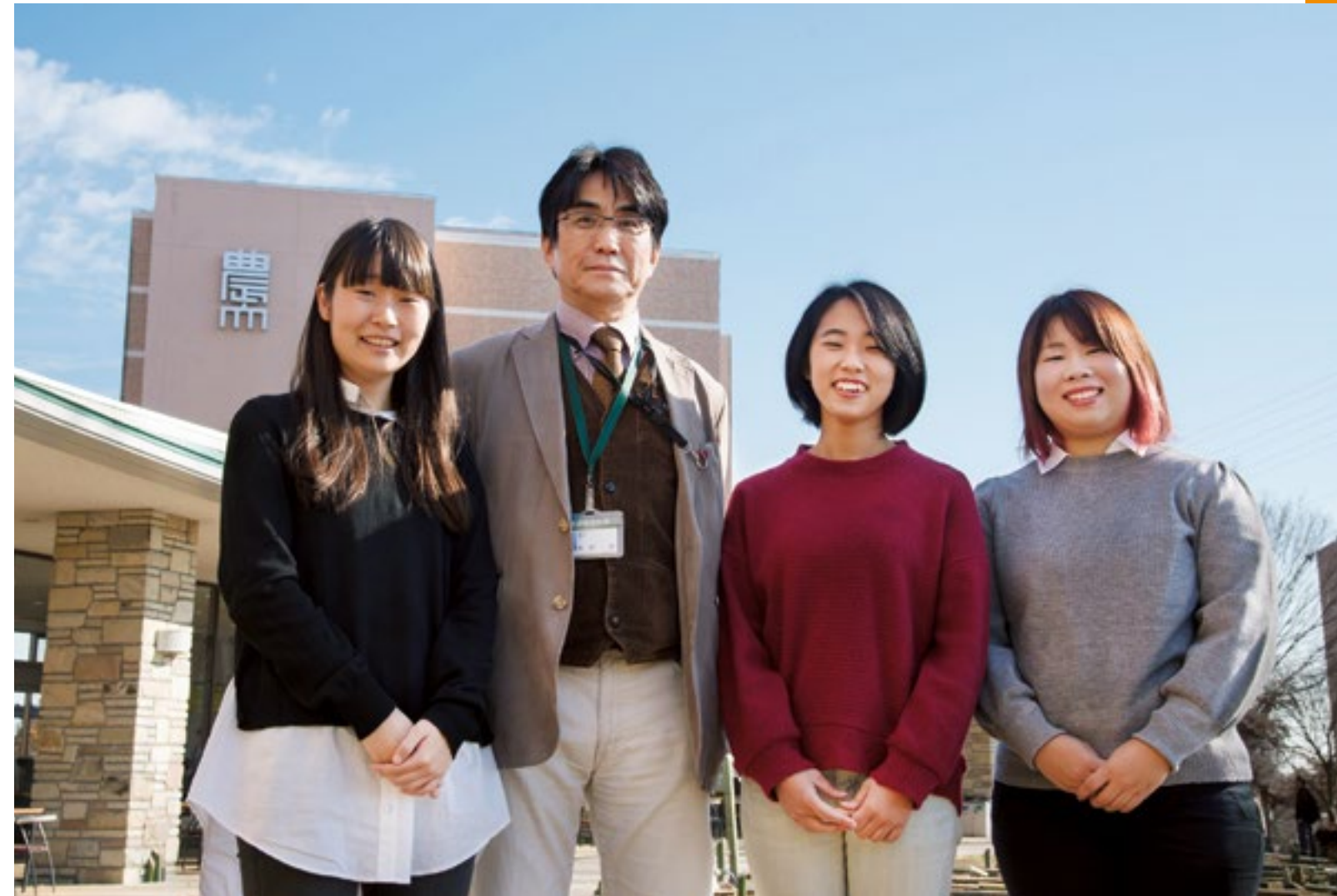
「うちは農家ではないので、大学で野菜の知識を学んではいても、実際の現場を体験したり、農家さんに話を伺ったことがありません。その未経験の部分を補おうと1、2年時にも農業体験やファームステイに取り組みましたが、男性目線のものが多いと。今回は女性農家さんの話を伺えて、とても参考になりました」

また、茨城県阿見町のインターンシップでは、農機を使った実習が勉強になったといいます。

「北海道では、畑の規模の大きさや、搾乳ロボットを導入している牧場に驚きました。個人で希望してもあれほどのところは見られません。今回のインターンシップはとても貴重な体験でした」

さまざまな現場を見ることで、女性の感性を受け入れる器が農業にはある、と実感した越地さん。卒業後は、農業法人での就農を目指しています。

1年生の高原草さんは日本の農業について多角的に学ぶ「農業ビジネスデザイン（二）」を受講。その一環で、農業女子メンバーである篠崎祭さんのカントリーファーム



厚木キャンパスにて。左から高原さん、平野准教授、越地さん、萩さん。

農業女子育成のための プロジェクトを実施

農学系の学問を専攻している女子学生、ノケジョ（農学系女子の略）が年々増えています。その学生たちと、現在活躍している農業女子を結びつけ、職業として農業を選択する未来の農業女子育成を目指すとして、農林水産省の農業女子プロジェクトでは「チームはぐくみ」を平成28年から開始。

そのパートナー校である東京農業大学では、世田谷・厚木・北海道オホーツクの3キャンパスで活動が行われており、厚木では農学部農学科作物学研究室の平野繁准教授のもと、積極的にプロジェクトに取り組んでいます。

「学生たちのうち、農家の後継者は2割もいません。残りの8割以上の学生をどうやって就農へ導くか。本学ではさまざまな取り組みを行っています。昨年の夏休み期間にチームはぐくみの一環で3キャンパス合同で行ったインターンシップには15名の女子学生が参加し、非常に好評でした」

その内容は、神奈川県、山梨県の農業女子メンバーの農場を見学し、茨城県と北海道の農場で農業実習するというもの。参加した学生たちは、さまざまな農業の現場に触れることで、卒業後の就農をより強く意識したといいます。

最後に紹介する4年生の萩由加里さんは、稲作農家の後継者。兄とともに稲作をやるうと東京農業大学に進学。その夢をこの春から実現させる、まさに未来の農業女子メンバー候補です。

「大型農機を扱う稲作は、女性には大変で向かないといわれますが、祖母はコンバインもトラクターも使いこなしていました。母は女性ならではの細やかな視点で稲を育てていた。女性にできないことなんてない！ 稲作農家のトップを目指します」

ノケジョから農業女子へ。若い芽はすくすくと育っています。

Profile

東京農業大学

世田谷・厚木・北海道オホーツクの3キャンパスを有し、農学部は厚木キャンパスにある。「人物を畑に還す」という建学理念のもと、生命、食料、環境など、さまざまな分野から「農学」を探究。3キャンパスで農業女子プロジェクト「未来の農業女子育成 チームはぐくみ」に大学初として参加している。
<http://www.nodai.ac.jp/>